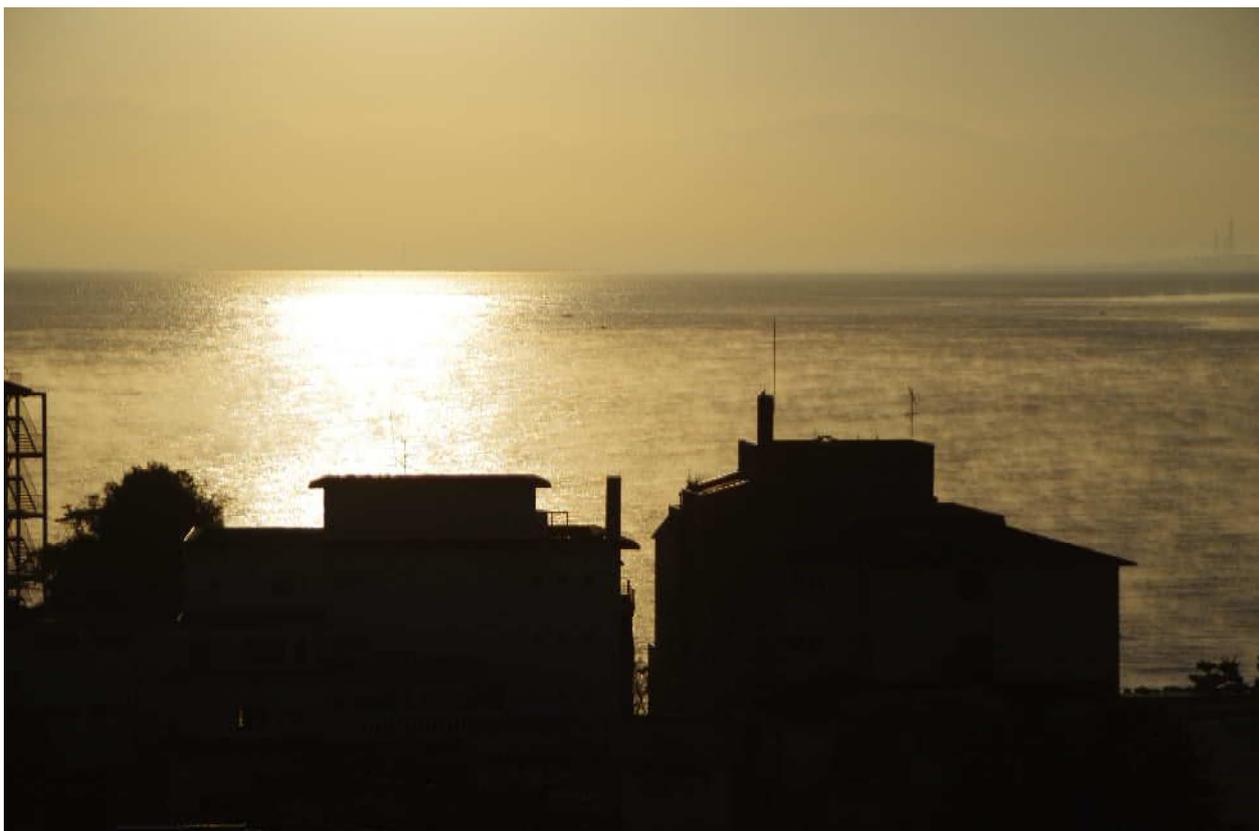




令和4年度  
中学生の主張  
in  
かながわ

---

記録集 2022



## はじめに

今年で44回目を迎えた「中学生の主張 in かながわ」は、「少年の主張全国大会」の神奈川県大会として、すっかり定着しています。引き続き新型コロナウイルス感染症拡大が懸念される中、「どのようにすれば、より例年に近い形で届けられるか」を軸にして、安全に大会を行えるよう準備が進められました。

中学校では、コロナ禍における新たな生活様式が定着しつつある中、本年度も熱意があふれ、手書きの温もりのある作品の応募が多数ありました。

9月25日に県立青少年センターで開催された発表大会では、「感染症拡大防止を図りながらも、いかに生の感動を届けられるか」に重点を置き、会場には選出された発表者6名のほか、奨励賞受賞者8名、保護者、5名の審査員、スタッフのみが入室して発表を見守りました。また、審査結果を待つ間のアトラクションについては、本年度は鶴沼高校書道部による書道パフォーマンスを見ていただく形としました。そして、多くの方々のご協力により、発表大会は無事終了し、本県の代表として、平塚市立春日野中学校3年の角野理望さんを全国大会に推薦することができました。

発表会では、差別や戦争被害から「平和」を願うもの、挨拶やスポーツマンシップの素晴らしさを訴えるものの他、食事の大切さやいじめについてなど、それぞれの個性の多様な在り方についての危惧や実感を訴えるものなど、様々な題材を、それぞれの生の声で個性豊かに表現していただきました。

中でも、昨年度同様、新型コロナウイルス感染症に関する作品は多く、特に部活動や学校行事の中止や縮小などについての苦労や悩みその他、オンラインでの活動、それに伴うモラルの在り方など、新しい生き方を模索する内容のものがありません。また、SNSの使用におけるモラルを問うものや、SDGs、LGBTQ、安楽死など生死に関する内容が多かったことは、今年度の大きな特徴でした。

本記録集には、本年度の発表大会に選出された7作品と、奨励賞に選出された10作品を収録しています。この記録集を通して、中学生の純粋な想いを多くの方にお届けできれば幸いです。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、県内各中学校の関係者の方々をはじめ、ご応募いただいた中学生の皆さん、ご指導に当たられた先生方、そして、ご協力いただいた全ての方々に心から感謝を申し上げます。

令和5年1月

神奈川県立青少年センター  
館長 兄内 宏

# 発表大会の様子



最優秀賞 角野 理望さん



水野 珠和さん



吉田 陽菜乃さん



本間 誉さん



今井 陽香さん



副賞：陽雅堂制作



宮下 真翔さん



会場の様子



審査員の先生方



アトラクション（鶴沼高校書道部）



アトラクション（鶴沼高校書道部）



神奈川県知事賞



講評（松田審査員長）



優秀賞・奨励賞受賞者のみなさん

# 目次

◆はじめに	1
◆中学生の主張 in かながわ発表大会の様子	2
◆作品集	
最優秀賞（神奈川県知事賞）	
ナイチャー、そう言われた日から 角野 理望 平塚市立春日野中学校 3年	5
優秀賞	
食べること（神奈川県教育長賞） 水野 珠和 横浜共立学園中学校 3年	6
青春はコロナに勝つ（神奈川県福祉子どもみらい局長賞） 吉田 陽菜乃 横浜共立学園中学校 3年	7
愛の心が勝る時（神奈川新聞社賞） 本間 誉 伊勢原市立中沢中学校 2年	8
「全力」の価値（NHK横浜放送局長賞） 今井 陽香 伊勢原市立中沢中学校 3年	9
懐かしさから学ぶ（t v k賞） 内田 匠海 平塚市立春日野中学校 3年	10
自分の信じる常識と生きてゆく（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞） 宮下 真翔 伊勢原市立中沢中学校 3年	11
奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）（50音順）	
心の財産 秋山 華凜 鎌倉女学院中学校 1年	12
ことばと想いを紡ぐ 石川 心暖 山北町立山北中学校 1年	13
私の、未来の親友 石渡 叶恵 鎌倉女学院中学校 1年	14
コロナ禍での願い 市場 ここみ 川崎市立菅中学校 3年	15
私たちの誇り 井上 優菜 山北町立山北中学校 3年	16
不登校だった私 太田 謙進 横浜市立南戸塚中学校 3年	17
社会を作った大人たちへ 齋尾 都和乃 横浜共立学園中学校 3年	18
ひと手間の大切さ 酒匂 日和 神奈川県立相模原中等教育学校 1年	19
より良い活動に向けて 鈴木 詩歩 伊勢原市立中沢中学校 2年	20
生きること 野元 志唯 洗足学園中学校 2年	21
<参考> 「第44回少年の主張全国大会～わたしの主張2022～」内閣総理大臣賞受賞作品 あなたの声、心に届け 山梨県 北杜市立甲陵中学校 3年 前橋 真子	22
◆実施概要	23

最優秀賞（神奈川県知事賞）

## ナイチャー、そう言われた日から

平塚市立春日野中学校 3年 <sup>すみの</sup>角野 <sup>さとみ</sup>理望



沖縄では、本土の人のことを方言で「ナイチャー」と呼ぶ。私が、沖縄で過ごす中で最も印象に残った言葉の一つだ。

私は、小学四年生の時、父の仕事の関係で沖縄に引越した。そこで日々を過ごす中で「ナイチャーだからか」そう言われたことがある。当時の私は、意味こそわからなかったが悪い感じで使われていることはわかった。家に帰った私は、母に尋ねた。「ナイチャーってどういう意味」それに対し、母は、「本土の人に対してあまり良くない意味で使われる言葉と聞いたことがあるよ。」と答えた。なぜ、良くない意味で使われるのか、そこではあまり深く考えなかった。しかし、今となっては、歴史が深く関わっているとわかる。

沖縄で過ごした四年間、毎年平和学習で沖縄戦について学んだ。実際に、沖縄戦を生き延びた方からもお話を聞く機会もあった。その中で、沖縄戦でアメリカ軍の侵攻はもちろんのことだが、日本兵が沖縄の方々を傷つけるような行動をとったことを知り、沖縄の方々は深く傷つき、憎しみの感情を抱いているのだと思った。また、戦後も沖縄は本土よりも長くアメリカの統治領に置かれたことを知った。理解が深まるうちに、ああ、日本はこんなことをしたのか、「ナイチャー」という言葉のもつ重みがだんだんと分かってきたのだ。周りの子が、戦争を体験したおじいちゃん、おばあちゃんから直接話を聞き、骨の髄までわかって書く平和についての作文は私の心をチクチクと刺し、これは一生かかってもわかりきれない、わかったと言ってはいけない領域にあるものとしていつしか私の心の中に染み付いた。そして、中学二年生になる春には、神奈川へ戻ってきた。

神奈川では、平和学習はなく、このまま沖縄戦についてのあの生々しい記憶が薄れていくのではないかと。そう危機感を持った私は、去年、読書感想文で戦争についての本を選び、少しでも記憶に留めようと、必死に書いた。そして、その作文は市内で入賞してしまった。もちろん、自分の作文が認められたことは嬉しかった。しかし、「ナイチャー」の私が、沖縄戦について書いていいものか悩みながらも書いたものだったので、それ以上に素直に喜べない気持ちが膨れ上がった。ずっと悩んでいくうちに最近、一つの答えに辿り着いた。わかりきれないけれど、

沖縄戦についての記憶を留め続けること、わかりきれないことをわかりきれないなりに考え続ける、それが私のやること、やるべきことだとそう思った。そして、今も考え続けて書いている、この作文で。

神奈川で沖縄戦について知る人はそう多くはないだろう。また、戦争について考える機会がかなり少ないと中学生の私には感じられる。「戦争で甚大な被害があった地域の子供だけが戦争について学び、平和への一步を踏み出そうとするべきなのだろうか。」私は絶対に違うと思う。もちろん戦争について知ることは本当に辛い。沖縄で初めて、平和学習を受けたときは、涙が出そうなほど辛く、夜は思い出して起きてしまうこともあった。しかし、平和の階段は、一人一人が戦争について自分ごととして知り、もう二度と戦争は起こさないぞという強い意志でしか登れない。でも、このままでは人々の記憶から戦争が薄れ同じ過ちを繰り返してしまうのではないかと不安に思う。だから、もっと学校などの教育の場で戦争について知る場を、考える場を作るべきだ。未来へは、戦争ではなく平和を必ず残したい。また、私も平和を繋ぐ役割ができないかと考えたことはある。しかし、ナイチャーで沖縄戦についてわかりきることのできない私が、周りの人に沖縄戦を伝えていいものか分からず神奈川に戻ってきて一年間、家族以外と話したことはない。この作文を書くこと自体、申し訳ない気持ちになる。また、戦争がなくなることを願うだけでは、祈るだけでは平和が訪れないことをロシアがウクライナを侵攻し、戦争が始まったことで思い知らされた。私が平和を祈り願ったことは無駄だったのだろうか。私は祈り願うこと以外に何ができたのだろうか。そんな疑問ばかりが私に残る。

「ナイチャー」、そう言われた日から始まった私の葛藤。これだけは、大人になっても歳をとっても考え続けていくことだと思っている、ずっと。そして、私は一人ではなく、この作文を読んでくれている人達をはじめとする世界中の一人一人と共に、平和の階段を登りたい。一人一人の意志が大きく、強くなるほど平和に近づくはずである。

優秀賞（神奈川県教育長賞）

## 食べること

横浜共立学園中学校 3年 <sup>みずの</sup>水野 <sup>たまな</sup>珠和



突然ですが皆さん、食事をするのは好きですか。私は頭から離れたことがないくらい大好きです。小学校の時の給食では率先して「おかわりじゃんけん」に参戦し、人気の食材を勝ち取った際のうれしさは今も忘れられません。また、中学生になってからは、食事を作ることも好きになり、一週間の献立を立てるのが週末の楽しみになっています。

先日、家族で食事をしているとき、父からドキッとす話を聞きました。それは、父の職場の若手の方々のうち三人が食事をとること自体を面倒に感じているということです。納得できず、インターネットで検索してみると、確かにそれは父の職場だけの話ではありませんでした。今まで考えたこともないことでしたが、改めて、食事への価値観が人により大きく違うことに愕然としました。

みなさんご存じの通り、日本には「いただきます」と言う素敵な言葉があります。私は食事の前にこれを言う瞬間、いつも最高の幸せを感じます。もちろん、今から待ちに待った食事をとれる喜びからでもあります。でも、それだけではありません。それには、命をいただくこと、目の前の食べ物に関わった方々への、そして食事ができる環境にあることへの感謝を思い起こさせてくれるからです。しかし、テストの直前であったり、嫌なことがあったりした時にはこの「感謝」を忘れてしまうこともあります。そういうときの食事は味はしても、何の感情も沸きません。そう考えてみると、食事が面倒と感じる方の気持ちもわかるような気がします。

少し話は変わりますが、最近、SNSなどでよくダイエットの記事を見かけます。そして中には、かなり制限したダイエット法などを書いているものもありました。自分の身体のために何かすることは大切だと思います。ですが、ここで言う「食事」は、本当に「食事」であるのでしょうか。実は、私にもその経験があります。私は、バレエを習っていて、体重管理のためにダイエットをしたことがありました。当時の私は、今よりも太っていて、つま先立ちで踊るなんて考えられない体型でした。しかも、食事の知識がなく、「食べる量を減らせばいい」とか、「炭水化物を抜けばいい」くらいに考えていました。その結果、もちろん体重は減りました。ですが、全然疲れがとれなかったり、イライラしてしまったり、良くない

ことが続きました。そして何よりも、「食べること」が怖くなってしまったのです。そのときにやっと自分が間違っていることに気づきました。また、自分の食べたものが自分の身体を作ることも改めて実感しました。そんなことがあって、小学生の時以上に食事を大切に思うようになりました。

皆さんの中にも、同じような経験をしている人もいるかもしれません。そうでなくても、「他にやりたいことがあって食事の時間がもったいない」と考えている人がいるかもしれません。ですが、そんな風に「食事」をする方がもったいないです。

食事の価値とは何でしょう。繰り返しになりますが、自分の身体を作る大事な基盤です。そしてもうひとつが食事中に感じる幸福感であると思います。岡根谷美里氏が書かれている「世界の台所探検」という本の中で、ケニアのある村で、国の道路開発計画で家を失う家族の実話が語られています。その家族と一緒に過ごした著者は、そんな一日の中で家族みんなが必ず笑顔になる瞬間は夕飯の食卓を囲むときだったと書いています。「開発に憤慨していても、何ら特別な食事でなくても、手作りの料理を食べながら一緒に過ごす時間はみんなが笑顔になっちゃうのです。国を超えて海を越えて、食卓の幸せは共通なんだ！」と。

現在、貧困による飢餓や食糧難は、世界的に深刻になっています。そしてこれからは、さらに深刻になると言われています。そんな未来でも食事は私たちに希望を与えてくれるのだと信じています。感謝し、味わい、美味しさをかみしめ、幸せを感じる、それこそが、「食事」であると思います。そして、そうであって欲しいと願います。

日々の生活では色々なことがあり、いつも思い通りにはなりませんし、私には想像もできない環境にある方が大勢いるはずですが、それでも、だからこそ私は食事の力を信じたいと思います。なぜなら、食事は、私がとびきり好きなことだから。

優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）

## 青春はコロナに勝つ

横浜共立学園中学校 3年 <sup>よしだ</sup>吉田 <sup>ひなの</sup>陽菜乃



二年前、中学生になった私の喜びは、すぐに打ちのめされた。新型コロナのまん延で、入学式は延期、先の見えないリモート授業、部活動や行事もない期間が続いた。中学校の体育祭や文化祭に憧れていた私にとって、つかみかけていた宝物を奪い取られたような気持ちだった。

待ちに待っていた体育祭は、規模は縮小されての開催だったが、友達と夢中で練習し全力で挑んだ。自分達が本番で力を発揮できた時、先輩達の力強い意気込みを見せつけられた時、心が揺さぶられた感覚は忘れられない。しかし、例年であればもっと達成感があったのではないかとの思いも拭いきれない。

中学一年の秋、制限されながら部活動もスタートした。バレー部では仲間と切磋琢磨して練習に励み、この夏ついに他校との交流試合が実現し、勝つことができた。しかし、試合中は声を出す応援は禁止され、全力で奪った一点を、全力で仲間と喜び合うことができないもどかしさが残った。

コロナ前の学校生活はどんなものだったのだろうか。先輩達に聞くと、学校行事は自分達が輝く場であり、成長を実感できる場であったという。修学旅行、他校との試合、文化祭と魅力あふれるものばかりだ。高校生の先輩達は、楽しかったイベントを経験しているだけに、高校生活の思い出を作ったり、上級生としてリードしたりする機会が少なく、本当に残念だろう。悔しそうな先輩達の顔を見ると、この状況に対する怒りのような、あきらめのような気持ちが湧き起こってくる。

コロナ禍での学校生活はどうあるべきだろうか。私は社会の変化と比較して考えてみた。

新型コロナのまん延をきっかけに、企業ではテレワークが推奨された。緊急事態宣言が出されると、飲食店や映画館は休業や時短営業を強いられた。大学ではリモート授業が主となり、学生同士の交流が減り、退学や休学を選択した大学生もいるという。経済の活性化のために打ち出されたGOTOトラベル事業も感染再拡大のために停止された。昨年の東京オリンピックは緊急事態宣言下での開催となった。そして今、行動制限は徐々に緩和されている。何度となく感染の拡大と収束を繰り返しているが、再度制限が求められることはなさそうだ。これは、感染拡大は抑えなければならないが、それ以上に社

会経済活動を停滞させてはならないということだろう。

さて、では私達の学校生活はどうだろうか。感染者が減らない現状では、すべてコロナ前と同じようにはできない。しかし、社会にとって経済を回すことが必要であるように、私達にとっては自分たちからあふれる熱い思いや意欲を止めずに回していくことが必要ではないか。行事や部活動そのものだけではない。友達と話しながら帰ったり、体育祭や球技大会の作戦を出し合ったりすることも、ささやかだが学校生活の大切な一部である。さらに充実した学校生活を送ることは私達だけでなく、家族や先生方の願いでもあるはずだ。

私は思う。コロナは怖い。怖いのが、怖がったまま夢や好奇心を押さえて過ごしたくない。リスクのせいであれもできない、これもできないと思考を止めることなく、充実した学校生活を取り戻すことをゴールとして、どうやったら到達できるか皆で考えていこうではないか。以前と同じやり方が望めないのであれば、コロナ禍だからこその新たな企画を考えてもいい。例えば、修学旅行を縮小するなら、宿泊先でオンライン海外旅行やオンラインロールプレイング学習を行い、感染リスクを抑えつつ体験不足を補うことは考えられないか。皆でアイデアを出し合えば、コロナ前以上に面白い活動ができる可能性もある。

高校卒業まであと三年。仲間達と日々の生活を精いっぱい楽しみ、工夫しながら文化祭や体育祭を盛り上げていくつもりだ。そうすればいつか振り返った時、大変な世の中だったが満ち足りた中高時代だったと思えるに違いない。青春はコロナに勝つのだ。

優秀賞（神奈川新聞社賞）

## 愛の心が勝る時

伊勢原市立中沢中学校 2年 <sup>ほんま</sup>本間 <sup>ほまれ</sup>誉



私はクリスチャンだ。クリスチャンは愛をもって奉仕精神にあふれていると思われているけれど、私には自己中心的な心がある。だから人を、羨んだり、憎んだり、嫌なことを言ったり、したりする。そして、自分のしてしまった過ちを素直に認めて反省することができない。そんな自分が信じられない。

昨年の秋、私は部活内で孤立していた。きっかけは友人たちの悪口から始まる。「あの子、いつも言い方きついよね。ああいう態度とか、イライラするし、嫌い。」

その日は、普段、一緒にいない私が偶然、友人たちとその場において、気の強い友達の悪口に対して「うん、そうだよ。」と答えてしまった。私の心の中に、気の強い子への不満が少なからずあったからだ。そして、悪口を言われている張本人がその様子を聞いていたのだった。そこから、私の孤立が始まった。

話しかけても無視される。部活の練習で頼みごとをすると嫌な顔をされる。一方で、先生や先輩の前で話しかけると応じたり、途端に仲が良いように振る舞ったりする。そんな日々が私には耐えられなくなっていた。自分が悪いのは分かっていたけれど辛かった。しかし、自分はその自分の過ちを認めたくはなかった。たった一瞬の出来事で変わってしまった友達関係。これからどうすればいいか悩んだ。そんな時、聖書の言葉に支えられた。

「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」

この言葉が私を救った。孤立してさらに悪く思われたくない、嫌われたくない、友達の目を気にして束縛されたくない、そんな嫌がらせで疲れていた時、この聖書の言葉でぶれていた心が定まった。

また、この聖書の言葉から、私はまず自分がしてしまった軽はずみで無責任な言葉を反省しなければいけないと気付かされた。そして、自分の言動を反省してから、友達に手紙で謝った。また、信じてもらえなかったかもしれないけれど、友達のことが大切だということも伝えた。それは自分の本心だった。それが、私が出た来た「友達を愛する」という事だった。すぐに友達は赦してくれなかった。また、嫌がらせもすぐにならなかつた。けれども、私は聖書の言葉を胸に、無視も、嫌がらせも気にしないように過ごしていると徐々に仲が回

復していった。半年後、友達関係が戻った。あの時のことが悪夢のように思えるほど友達関係が元に戻った。今回の仲違いには、一人ひとりの自己中心的な心が原因だった。それをそのままにしていたから、それぞれの悪い思いが、互いに膨れ上がってしまったと考える。

このことを通して考えたことは、人は、自らの非を認めることは難しいということ。そして辛いこと。しかし、自らの心の中に、自己中心的な思いがあることを認めて、思いと行動を改めて、考えることが出来れば、あらゆる問題を解決出来るのではないだろうか。

この問題は、私の個人的な心の問題だけでなく、家族や社会でも共通して起きていることなのではないだろうか。自己中心的な心があると、家族関係や友達関係で悩み過ぎたり、自分がどう思われているのか気にし過ぎたりする。そのような心の貧しさが、殺人や盗みといった犯罪、国同士の戦争に発展しているように見える。

いじめに代表される人間関係の問題、犯罪や戦争といったものを、表面的に解決しても根本的な解決にはほど遠いと考える。しかし、少なくとも自分は、自己中心的な心があると認めることができる。そして、他人のことを自分の事のように大事にする、愛の心を持つことが出来る。

私は、これからも友達関係で悩むことがあると思う。その時、部活で起きた人間関係での葛藤、その後の回復を心に留めて、まずは自分の自己中心的な心を認め、友達を心から愛したい。その時、愛は、自己中心的な心に勝ると信じる。そして、相手を自分の事のように大切に、愛の心が私のまわりに広がっていくことを願う。

優秀賞（NHK横浜放送局長賞）

## 「全力」の価値

伊勢原市立中沢中学校 3年 <sup>いまい</sup>今井 <sup>はるか</sup>陽香



「ビピー」と、試合終了の笛が鳴った。コロナ禍でもやり切った3年間。悔いはない。主審が合図をし、私たちは深々と頭を下げ、「ありがとうございます！」と大きな声で言った。相手のチームもそれに応えるように大きな声で礼を言った。何故だろう。負けたはずなのに清々しい。私たちに勝ったチームを応援したくなった。それはきっと私だけではなかったと思う。互いに礼をする事で何かが通じ合った気がした。

あなたは「スポーツマンシップ」という言葉を知っていますか。スポーツマンシップとは、スポーツに対して全力を尽くすことや、公明正大であること、競技の対戦相手や審判、味方などへの敬意と尊敬を忘れないこと、などを指した言葉です。私たちは3年間いろいろなチームと戦ってきました。私たちの最後の試合で戦ったチームのように礼儀正しいチームもいれば、全力は出さない、声は出さない、相手チームへの敬意もない、そんなチームに出会うこともありました。そして、そんなチームに負けてしまうこともありました。しかし、スポーツをする上で一番大事なのは、強さより心だと私は思います。この言葉を聞いたらきっと、負け犬の遠吠えだ、と考える人もいるでしょう。そこで一度立ち止まって考えてほしいです。私たちには出来ないから、と諦めずに考えてほしいのです。確かに、礼儀正しく真面目に部活をしているだけでは、試合に勝つことはできません。では、それで諦めてしまうのか？自分には勝てるような体力がないから、身長が小さいから、運がないから、と諦めてしまうのか？それは違うと思います。ではどうすればいいのか。努力するのです。みんなに認めてもらうために、応援してもらえるように。私は、部活に入りたての中一の夏、その日初めて話した先輩にこんな言葉を教えてもらいました。「徳を積む。」この言葉は、顧問の先生が大切にしている言葉だと聞きました。自分が大会に出るときに応援してもらうチームになるために、負けたときに「もっと試合してほしい」と言ってもらえるチームになるために、試合した相手に対戦できてよかったと言ってもらえるように、常日頃から周りに感謝して生活するのが、この言葉の意味だと先輩が教えてくれました。それから「部活」は、「部活」のためだけの「部活」ではなくなりました。まず、すれ違った人に挨拶するように

なりました。友達はもちろん、先生にも挨拶をしました。そして、どんな小さなことにも感謝をしようと心掛けました。先生に「バレー部は礼儀がいいね」と言われたときに、とても嬉しかったのを今でも覚えています。そんな私たちの行動が功を奏したのかは分かりませんが、先生方は私たちをとっても応援してくださいました。大会にも見に来てくださり、私たちは全力を尽くすことができました。私はそのとき、ここまでやってきた努力がきっと全部スポーツマンシップにのっとる、ということなんだな、と思いました。あの時の「こんにちは」の挨拶の音が、あの時の全力の一步が、最後の試合の清々しい気持ちを生み出したかは分かりません。ですが、無駄ではなかったことだけは確信していました。

私は、私の本気で部活に取り組んだ3年間をもって、スポーツマンシップが大切、という共通の感覚を持ってスポーツを行う社会を創るべきだと主張します。世の中には、「スポーツは結果が全て」という考えもあると思います。というか実際にそうだと思います。しかし、結果に至るまでの過程を振り返ったときにそれが光り輝くかは、やはり、自分達がどれだけそこに全力を注いできたかだと思います。私が目指す社会の第一歩として大事なものは、自分達がやってきたことにどれだけ自信を持てるか。そして、礼儀を考えない、全力を尽くさないということにどれだけ疑問を持つことができるかだと思うのです。今、部活で悩んでいる人に伝えたいことは、自分達が全力でやってきたことは絶対かたちになるということ。「かたち」というのは、必ずしも勝利として返ってくるとは限りませんが、それが結果自分の糧になるとことに間違いはありません。スポーツをする全ての人のために、私はスポーツマンシップの大切さを主張します。

優秀賞（tvk賞）

## 懐かしさから学ぶ

平塚市立春日野中学校 3年 <sup>うちだ</sup>内田 <sup>たくみ</sup>匠海



「とうとう子ども会がなくなるんだって。」先日、突然祖母から電話がかかってきた。祖母の住んでいるところは、小さな自治会だけれど、静かで、のんびりとしていて道路にチョークで子どもの落書きのあるような、とてもいい地域だと思っていた。昔は子どもも多くて、夏祭りや水泳教室、バーベキューなど地域の人が中心になって、たくさんの行事が行われていた。私も小さい頃に祖母の家に遊びに行くたびに参加させてもらっていたが、外から来た私を「よく来たね。」と快く迎えてくれる温かい雰囲気があった。しかし、今では高齢化がすすみ、地域の中を歩いていても子どもの姿はほとんど見えず、大きな一軒家に高齢者が一人で住んでいるような状況になってしまった。ここ十数年で急激に変わってしまった。そして、とうとう小学生が数人になってしまったようだ。祖母は電話で「寂しいね。子どもの声が聞けないのは。」と言っていた。皆さんの住んでいる地域は、子どもの笑い声があふれていますか。

日曜日の夕方、サザエさんという国民的アニメを見た。私にはとても不思議に思えた。夕飯は七人で食卓を囲み、今日の出来事などをみんなで話す。サザエさんは、いつも外で近所の人と立ち話をしたり、ご近所の家におすそ分けなどもする。近所のお店の人はみんな、お客さんのことを知っていて、買い物ついでに長々とおしゃべりしている。今の私たちの生活とはかけ離れているように感じる。今は、核家族が多く、毎日忙しくてご飯を食べる時間もバラバラ。私の家も母と弟だけで夕食を食べ、その後仕事から帰ってくる父、塾から帰ってきた私の順で食べる。近所づきあいも少なく、隣の家に誰が住んでいるかもあまり興味がない。コンビニやスーパーでは店員の人と長々と話すことなどなく一言も話さなくても、買い物は済んでしまう。さらに、コンビニなどは無人化が進んでいて、話す相手すらいないところもある。皆さんは人の温かさを感じる社会を好みますか。それとも人間関係の煩わしさを好みますか。サザエさんを一緒に見ていた母は「懐かしい感じ。私が小さかったときは、こんな感じだったよ。」と言っていた。私は祖母が寂しいといった気持ちが少しわかったような気がした。

昨年大雨で私たちの住んでいる地域には避難レベル5「緊急安全確保」が出された。祖母の住んでいる地域

は大きな川に挟まれているので、川の水位が氾濫レベルにまで達し、あちこちの体育館に避難所が設置された。祖母から「高校の体育館に避難した方がいいかしら。」という電話が何度もかかってきた。相当怖かったのだろう。私たち自身も恐怖を感じていた。大雨で、助けに行きたくても行けなかった。そんな時、祖母に手を差し伸べてくれたのは、家族ではなく近所の人だった。近所のお嫁さんが「私の母も体育館に避難します。一緒に行きますか。」と祖母に声をかけてくれたそうだ。祖母はこれ以上雨がひどくなって外に出られなくなる前に避難しておいた方がいいと考え、近所の人たちと一緒に高校の体育館に避難したそうだ。この声かけがどんなに嬉しくて安心したかと、今でも祖母は繰り返し話す。

最近、コロナ感染症や大雨などの自然災害で、例え近くに住んでいても家族に会いに行くことすら出来ないということがわかった。唯一、そんな時に頼りになるのは、地域の人々の力ではないだろうか。同じ地域に住み、日頃から顔なじみの関係こそが、今必要とされていると思う。会ったら声をかける、心配なことがあったら耳を傾ける、困ったことがあればお互いに助け合う、そんなサザエさんのような「地域の力」が今や自然災害や変化の多いこの国では必要となっている。そんな地域づくりをするために中学生の私たちには何が出来るだろうか。まず、今出来ることをやってみよう。それは「あいさつ」。お金もかからず、子どもから高齢者まで簡単に出来ることだ。あいさつには不思議な力がある。私はあなたのことを気にかけていますよ、という暗黙の了解だ。いざという時、気にかけている人に声かけられるように、さあ、今日からマスクごしに笑顔で「おはようございます」「こんにちは」と言ってみよう。これからの私たちの地域づくりの第一歩だ。

優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）

## 自分の信じる常識と生きてゆく

伊勢原市立中沢中学校 3年 <sup>みやした</sup>宮下 <sup>まさと</sup>真翔



いつもより早めに梅雨明けし、部活の市内大会が連日続いた夏休みの始まりは、暑さが苦手な僕にとって忍耐が必要だった。試合に出ているベンチでもチームの勝利を信じて僕の家族は毎回試合を見に来てくれた。悔しい思いも誇らしい気持ちも感じた仲間と駆け抜けた中学最後の部活の夏が終わり、ほっとしたような寂しいような気持ちで久しぶりにのんびりと家族と過ごす夏休みに突入した。毎日のようにバレエのレッスンに通う妹も今年の夏はコンクールの数を減らして少しだけのびのびしているようだ。

そんな中、第七波と言われているコロナの流行で家族の身近な人達が次々と感染してしまう状況になってきた。父の同僚の子どもやママ友などだ。正直に言って、空気がこもりがちな体育館での試合観戦、人ごみやマスクを外す機会があるバレエコンクール会場などはリスクがあるから、僕は妹や母のことを前から少し心配していたのだった。妹には八月初旬に山梨県の清里で二日間行われるフィールドバレエのエキシビジョン出演がありとても楽しみにしていることを知っていたからだ。

僕自身も受験生としてこの大事な夏に集中して勉強をしたい。また、たまには友達と映画を見にいたり、山登りをするなどの予定もあるため、感染予防に努めようと思っていた。

そんな矢先、少し納得のいかないもやもやする出来事が起きてしまった。

陽性者なのに熱が下がったからと言って、娘の用事の付き添いで出かけてしまう人の話を聞いたのである。しかも行き先は人のたくさん集まる横浜だと分かった。感染してしまったこと自体は早くよくなってほしいと願うばかりだ。しかし、もし自分が感染してしまったら、「自分のしたいこと」と「他人の為に我慢すること」のどちらを優先すべきなのか。僕の場合、

「後者を選ぶに決まっている。第一、体も絶対にきついはずだから無理してでもやったら自分にも他の人にも良いことはない。たとえ医者にかかっていたとしても体に異変が起こったらみなし陽性として行動するのはみんなの常識だ。」

と思っていた。しかし、そんな僕の中の常識を覆す程、人に迷惑をかけてまでやりたいことって何だろうと僕は

考えた。どうやら親は子どものことになると少し無茶をしたり、非常識な判断をしてしまうことがあるようだ。子どもの頑張っている姿を応援したい、見たい。僕の母はその人の近くにいたにも関わらず、客観的な意見を冷静に伝えることが出来なかったことを後悔しているようだった。少しかっこよく言い過ぎたかもしれない。母の本音を言えば、あまり来ないでほしい、大事な予定もあるのに伝染ったら困ると言いたかったのだと思う。

我が家は今、感染することなく過ごせていて、結局妹の予定が潰れることもなかったけれど、

「もうこんなに我慢したのだから出かけたっていいじゃん。」

と言って油断したり、不安な体調なのに外へ出かけることは、今も新規陽性者が出続けている原因なので、これからもやめていこうと思った。また、周りが厳しい目で、ばれなければいいやを無くすことも必要だと思った。

この先まだ続いてしまうであろうコロナとの闘いの中で、お風呂は陽性者が最後に入る、トイレやタオルは別にするなど、人から直接聞いた話もきっと我が家で役に立つ日がくるのかもしれない。身近な人からの話はやっぱり一番僕の中に入りこんでくる。

今年の山の日も昨年と同じメンバー三人で大山に登る予定だったが、一人がコロナに感染してしまったと連絡が入った。他の人を誘うのではなく、二人で行ってしまうのでもなく、僕は同じメンバーでまた今年も行きたいからこの友達が治るのを待ちたい。そして正直に連絡して、僕やもう一人の友達、さらに他の人までもを守る判断をしてくれたこの友達を誇りに思う。

僕はまだ大人ではない中学生で、自分が正しいと思うことを人に押しつけるようなことはしたくないし、判断を間違えてしまうことだってあるかもしれない。それでも周りの人達が見せてくれる態度や生き方から学び、自分なりの常識をこれからも信じてみたい。僕はこのテーマで作文を書こうと思ったとき、誰かを正そうとか責めようとかそんな気持ちはなくて、自分が納得のいかない体験を通して考えることで、他の人がそのことをどう考えているのかを知るきっかけになればいいなと思った。たとえ正しい答えは出なかったとしても、きっと僕の未来に生かすことができると信じて。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## 心の財産

鎌倉女学院中学校 1年 <sup>あきやま</sup>秋山 <sup>かりん</sup>華凜

「私はこう思う」と自分の意見を主張するのは意外と難しい。私は小学二年生の時に、ある事をきっかけに自分の意見を主張する勇気を失ってしまった。それ以来私は相手の意見に合わせ自分の意見を主張することができなくなった。「本当の自分」を隠すようになってしまったのだ。

ある事というのは、授業中に自分の意見を述べた際、その意見に対して皆から否定された。その時の皆からの冷たい視線、冷たい言葉、張り詰めた空気、初めて感じた居た堪れない感覚がトラウマとなったのだ。そして、自分の意見を主張することから逃げるようになってしまったのだ。

あの瞬間、クラスメイト全員が敵に見えた。私の味方は誰もいないように感じられた。それは、私の意見を全て否定する人がいたり、その人に同調する人たちがいた。その他にはうつむき、無言を貫く人もいた。つまり、私の味方はいなかったのだ。

しかし、それが全てではなかった。授業が終わった後、クラスメイトの一人が私の所にやってきた。うつむき、無言を貫いていた子だ。その子はこう言ったのだ。「本当は私も多数派とは違う意見だったけど、皆の前で言う勇気がなくて言えなかったんだ。」と。

私はその日に、初めて知った。自分の意見を主張する怖さと、それが、自分だけではないということ。

私はこのような話を聞いたことがある。アメリカ人は堂々と自己主張ができる。一方で、日本人は上手く自己主張をすることができないということ。日本人が上手く自己主張ができないと言われているのは、“個”としての自分を生きているのではなく、“関係性”としての自分を生きているからだ。アメリカ人は、相手を説得し、自分の意見を通すつもりでコミュニケーションをとるため、遠慮のない自己主張がぶつかり合う。しかし、日本人はアメリカ人のように、相手を説得して自分の意見を通すのではなく、お互いの気持ちを尊重し、誰も傷つけない良好な場の雰囲気をつくる。相手がどう思っているかが気になったり、相手の視線が気になる。つまり、自分の意見を押し出すよりも、相手の意見を汲み取る日本人が多いのは、相手の“視線”が気になるからなのだ。また、自己主張が苦手な代わりに相手の気持ちを察する共感性

を磨いていたからなのだ。

この話を聞いた時、私はこう思った。もしも小学二年生のあの時、自分の意見を主張できた自分を認め、主張する怖さから逃げていなければ、その後の小学校生活はもっと違う自分だったのではないだろうか。自分のやりたかったことなどがもっとたくさんできたのではないだろうかと思う。

そんな経験をし、色々な思いを胸に中学生となり、新たなスタートラインに立った。もしかしたら、皆より後ろからのスタートかもしれない。あの時のトラウマがよみがえってしまうことがあるかもしれない。けれど、世界には様々な考えを持った人がいて、関係性を大切にしつつ“個”としての自分を生きてもいいのではないかと考えるようになってから、私は少し自信が持てたのだ。その自信が自らを成長に導く、そんな気がする。まわりの意見に流されるのではなく、受け入れて考え、さらに良い方法を模索する。そんな自分になりたい。「私はこう思う」と伝えることが自分を知ってもらえる近道となる。小学生の経験は、立ち止まったり、転んだり、悩んだ事もあったけど、色々な気付きがあったということは確かだ。そんな「心の財産」を持って中学生を楽しんでいきたいと思う。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## ことばと想いを紡ぐ

山北町立山北中学校 1年 <sup>いしかわ</sup>石川 <sup>このん</sup>心暖

「お元気ですか。私も元気です。」

これは、母が親しい友への便りに宛てる、お決まりのフレーズです。母は手紙を書く事が大好きで、私と一緒に雑貨店へ行くと必ず、その季節に合った便せんや絵はがきを探します。あれやこれやと手に取って、うれしそうにどのデザインが良いかと、私にまで選択をせまる勢いで、大人でありながら、まるで子どものように、目をキラキラさせている様子は純情可憐に見えました。贈った相手が喜んでくれる事を期待し、想像を膨らませ、悩む時間も楽しいものにするところから、「ことば」の贈り物の準備を始めているようです。

ある日、私の部屋の本棚を片付けていると、何とも懐かしい思い出が、窮屈に奥へしまわれていました。

それは幼稚園の頃のアルバムでした。何気なく取り出して開いてみると、そこには無邪気な笑顔で写っている私と、母から宛てられた一通の手紙が入っていました。

ドキドキ緊張しながら開けてみると、数枚にわたり見覚えのある、なじみのある母の字が丁寧に書かれていました。母からの手紙は、私が幼稚園を卒園する門出に際して激励する手紙でした。この、はなむけの手紙は幼稚園を卒園したばかりの私にも、きちんと読めるように、すべて平がながふってありました。母が一字一句まちがえないように時間をかけ、私の事を想って書きしたためた、心遣いがあふれている手紙でした。

私は普段から手紙を書くという習慣が、ほとんどありません。自分で書く機会も皆無なので、手紙のやり取りをする機会もあまりありません。それに加え、今はデジタル化が進み手書きの習慣が激減してしまったといわれています。Z世代である私たちのマストアイテムはスマートフォンです。オンライン全盛時代で、「SNS」が主流となり、アナログである手作業は取るに足りないツールで、必要性が低いからでしょう。

そこでアナログである手書きと、デジタルである電子メールの利点と欠点の特徴を考えてみました。

手書きの利点は、読みたい時に何度も読み返す事ができ、はがき等に手書きのイラストを描いたりする工夫で、相手を喜ばせたり、和ませたりする事が出来る魅力があります。しかし欠点は、ポストに投かんする事が面倒であったり、多くの文章を書く事が苦手だと思ふ人もいま

す。

一方、電子メールは近況報告等もメッセージとして手軽に送る事ができますが、欠点はメッセージを送信した後に、誤字等に気がついて直す事ができません。

そこで、手紙の醍醐味である楽しさや、深い味わいを肌で感じる為に、実際に経験する事が大切ではないかと考え、私も便せんで想いを綴る事に向き合ってみました。

母のように相手の好みに少しでも合うような便せんを選び、相手の事を考えてみました。書き出しから、大いに悩みながら。

手紙を書く事は、決して楽な事ばかりではありません。相手を想う事から始まり、届ける内容を考え、相手にふさわしい言葉を選び想像していた以上に時間もかかりません。

心の声に耳を傾け、目には見えない心情を言語化し、文章につなげる作業は労力も使います。しかし、その先には相手との心のやり取りや想いが、一本の糸電話のように、つなぐ力がかかっていると思います。遠く離れた旧友や離れて暮らす人との距離をぐっと縮めてくれる究極のアイテムは、手紙なのだと思います。

こうして母も手紙によって思いを馳せていたかと思うと、しみじみと深く身にしみる思いがしました。

何かと忙しく、時間に追われる時代だからこそ、手紙を書く事でゆっくり何かを考える事は、とても大切な時間です。またコロナ禍中だからこそ、安易に会えない人へ、手紙という最強のアイテムを使って、心と心の対話をする事もアナログである手紙でしか、成し得ないぬくもりがあると思います。

そして、手紙の「ことば」は糸で紡いで出来上がった布と同じように時には、手紙で相手の心を包み込んだり、優しい気持ちで寄り添える働きがあると思います。

母からの手紙をきっかけに、手紙の魅力に気づくことが出来たので、コミュニケーションを図る手段として、幅広く活用していきたいと思いました。

私の事を想う「ことば」をたくさん詰め込んだ宝箱のような母の手紙は、これからの私の心をきっと励ましてくれると思います。

いつでも手に取って読み返せるよう、そっと引き出しの中に。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## 私の、未来の親友

鎌倉女学院中学校 1年 <sup>いしわた</sup>石渡 <sup>かのえ</sup>叶恵

「私達、親友だもんね。」みなさんは、この言葉を使ったことがありますか。私は、言ったことがありません。理由は簡単です。私にとって、親友と呼べる友達がいないからです。

そもそも、親友とはどういうものなのでしょう。そこから私には分かりません。

親友がいなくても、親友の意味が分からなくても、私にはたくさんの友達がいます。だから、親友がいなくても別にいい、特定の誰かばかりと関わるよりもたくさんの友達と関わった方がいい、と思っています。いや、思っていました。しかし、「親友がいた方が良いのではないだろうか」と思ったことがあります。

私が、広く浅くたくさんの友達と関わってきたのは、「一人にならないため」です。もし、誰かと喧嘩をしても、他の人と一緒にいれば一人にならないと思ったからです。でも、そうではありませんでした。小学校高学年の頃になると、みんなは仲よしグループというものをつくり始めたのです。私はその状況にすぐ対応し、ある仲よしグループに入りました。グループに入らず、ちょこちょこ色々なグループに顔を出す方が一人になる可能性が高い、と考えたからです。それから、そのグループのみんなで行動することが多くなり、今まで以上にみんなと仲を深めることができました。そして、ある日同じグループの子にこう言われました。「私達、親友だもんね。」と。先ほど、この言葉を使ったことがないと書きましたが、言われたことはあったのです。でも、なぜかその時、私はうなずくことができませんでした。自分でも理由が分かりません。なのに、うなずけなかったのです。

その時、私は思いました。「私にとって親友とはどういうものなのだろう。」と。

その難問に悩んでいたとき、ある本に出会いました。「きみの友だち」という本です。題名を見て、この本は今の私の疑問に答えてくれるのではないか、と思い読み始めました。読み進めていくうちに、ある場面で主人公が言った言葉が心に刺さりました。

「わたしは『みんな』って嫌いだから、『みんな』が『みんな』でいるうちは、友だちじゃない、絶対に。」

最初は意味が分かりませんでした。でも、時間がたつにつれて少しずつ意味が分かってきました。友達は自分

と相手の一対一で成り立つものです。「みんな」というたくさんの人との間で成り立つものではない、ということだと思います。

そう考えた時、私は本当にこのままで良いのか、と思いました。一人にならないために「みんな」の中にいる私は実際には誰とも「親の友達」になれていないかもしれない、と思ったからです。たしかに、みんなの中にいれば安全です。でも、安全な場所で甘い蜜ばかり吸っていたら、親の友達や親友は絶対できません。そのことにその時やっと気づきました。「私達、親友だもんね。」この言葉が言われた時、うなずけなかった理由。それは、あのグループは私にとって、一人にならないための居場所に過ぎなかったからです。

そこで、私は思いました。親の友達が欲しい、と。自分が一人にならないための友達ではなく、心の底から信頼できる友達です。願わくは、親友と呼べるくらいの関係に発展できたらいいな、と思っています。

「親友」とはどういうものなのか、この問いの答え、自分なりに出してみました。親友とは、たとえ言いにくいことでも、相手のためになることを言える、そういう意味で信頼できる関係ではないでしょうか。そして、その関係がいつまでもずっと続いて、そこで初めて親友と呼べるのではないか、と思いました。

今は、私は誰と親友なのかまだ分かりません。でも、何年後か、心から信頼できてずっと関係が崩れないような相手がいたら、その相手が私の親友なのだと思います。これから私はたくさんのことを経験していく中で、そんな相手に出会えたらいいな、と思っています。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## コロナ禍での願い

川崎市立菅中学校 3年 <sup>いちば</sup>市場 ここみ

二〇一九年十二月頃から流行りだした「新型コロナウイルス感染症」。三年経った今も感染が拡大している。このウイルスは感染力が非常に強いので、多くの人々がマスクや手洗いなどの感染対策をしている。このウイルスは世界中に広がり、私達の生活を一変させた。

私はコロナ禍の中、小学校を卒業し、中学校に入学した。新しい学校生活が始まるのをとても楽しみにしていたが、「休校」からの始まりとなってしまう、とても悲しかったのを今でも覚えている。入学して二か月後、ようやく学校生活が始まった。しかし、それも分散登校という制限がついていた。それでも学校が始まったことはいれなかった。

中学校生活で私が特に楽しみにしていたのが、部活動だ。私はバドミントン部に入部した。部活も週に三日の活動で二時間程度などと制限がついていた。その短い練習時間で私は熱心に練習し、中学二年生の時に、初めての部活の大会でメンバーに選ばれた。とてもうれしくて友達と自主練をしたり、ランニングをしたりして体力をつけ、大会に向けてとにかく練習を頑張った。しかし、大会の前日、コロナウイルスの影響で大会は中止になったと顧問の先生から伝えられた。とても楽しみにしていた部活の大会が中止になり、私はコロナに対して怒りを覚えた。その後も遠征や大会が中止になることもあり、とても悔しかった。他にも体育祭が短縮になったり、合唱コンクール、自然教室が中止になったりした。

私は中学校生活で、一度も通常の体育祭を経験したことがない。短縮でも開催してくれたことはうれしかったが、やっぱり一度は通常の体育祭を楽しみたかった。コロナウイルスがどれだけ世界中で問題となっているかは私達もよくわかっている。しかし、コロナウイルスの影響だからといって、私達学生の楽しみである「行事」だけを中止にすることはあまり納得ができない。学校行事は勉強以外の面で学生の心の成長にとっても大切な学びの場だと私は思っている。大人は「行けなくなった修学旅行、中止になった体育祭は、また来年やろう。」と考えるのだと思うが、小六、中三の修学旅行や体育祭などの学校行事は来年に置き換えられない。

教育委員会や自治体の決まりごとがあるとは思いますが、学校行事について、メインとなる学生よりも大人が決め

てしまう傾向がコロナ禍でより強くなったと感じている。そして、それに私達学生は、我慢しているように思う。子供に代わって大人が物事を判断し、決めてしまいがちだが、私達は大人に自分達の意見を聞いてほしいのだ。コロナ禍での学校の行事の活動をどうするか、生徒に聞いてみてもいいのではないかと考えた。例えば、体育祭では何の競技をやり、何の競技はやらないのか、短縮にするのならば、どのような形を変えてどのように活動するのか、を生徒に投げかける。また、生徒らが考えて企画、運営する学校独自の行事を開催するなどしても楽しいのではないと思う。このようにすることで、一つの学校行事として楽しい思い出になると思う。また、他学年とも交流できるいい機会になると考える。

話を聞き、意見を言い合い、物事を決めていくことがコロナ禍で大切だと思う。「コロナ禍だから」と活動を制限するだけではなくて、生徒らが、コロナ禍で何ができるのかを考え企画して行事を開催できるようにしていきたい。

私は、子供の権利を認める考えがもっと広まってほしいと願う。コロナ禍で学校行事が中止になり、我慢する学生が減ってほしいと思う。そのために、このコロナ禍を大人だけでなく、子供の意見にも耳を傾け、子供と一緒に物事を考える機会をたくさん作ってほしい。そして、私達学生もコロナ禍だからこそ、一人ひとり、自分には何ができるのかを考え、前向きに活動してほしい。

今、新型コロナウイルス感染症の第七波がピークを迎え、感染者が急増している。これからはコロナとうまく共生していくために、日々、何ができるかを考えて生活していきたい。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## 私たちの誇り

山北町立山北中学校 3年 <sup>い</sup>の<sup>う</sup>え <sup>ゆ</sup>な <sup>な</sup> 井上 優菜

あたり前にあった学校生活をあたり前に送ることが出来る。そのありがたみを私達は痛いほどよく知っている。中学校に入学してからのこの三年間マスクを外している写真は、ほぼない。そして、遠足や体育祭・文化祭といった学校行事の中止、縮小。思い描いていた中学校生活とはかけ離れたものになったのが現実だ。しかし、このような社会状況から気づけた大切なこともたくさんある。

まずは、かつての日常のありがたさだ。毎日学校へ行き、友達や先生と顔を合わせ授業を受ける。たくさん話し、たくさん笑い合う何気ない日々が私にとって、いや世の中の学生ほとんど全員にとってあたり前のものだった。この日常がプツンと途切れ、先が見えない恐怖と不安におそわれるようになったあの日までは…。その日を境に、テレビを点ければ、携帯を見れば毎日感染者数が発表され、どこに行くにも、何をすることも消毒をしマスクをする毎日。学校に行っても友達と一定の距離を取り、心待ちにしていた行事もない非日常の様な日々があたり前へと変わったのだ。私は、心温まるニュースが流れていた日々。友達と毎日毎日共に笑い合っていた日々。学校行事で多くの思い出をつくらせていた日々がどれほど貴重で幸せなものだったのか痛感させられた。

そして、仲間が持っている力の大きさにも気づかされた。かつての日常がうばわれ、多くのことに制限される中でも仲間の笑顔だけは私のそばから消えることはなく、たとえマスクで遮られたとしても輝き続けていた。正直に言えば、私にとって制限される日々は苦しいものだった。しかし仲間は、そんな日々にも文句を言ったり、弱音を吐くのではなく、制限の中で何事にも全力で取り組んでいた。その仲間の姿は、私に前を向く元気と勇気を与えてくれた。そして、そんな仲間と過ごす毎日はとても充実し、縮小されてしまった学校行事も私にとってかけがえのない最高の思い出になったと同時に、大切なのは自由や行事の規模ではなく、今置かれている状況の中で仲間と手を取り合い、最大限に楽しむ方法を見つけ出すことなのではないかと感じた。そして、私達には、その力があると確信した。

大人の方々は、私達学生や若者に対して、「学生時代を楽しめなくてかわいそう」や、「マスク顔の写真ばかりでかわいそう」などとよく同情してくる。でも、私はそう

は思わない。たしかに、大人の方々が体験してきたような、世間一般の青春ではないかもしれない。でも、今の時代を生きる私たちは、きっと大人の方々が思っている何倍も強く、何倍も前向きだ。そんな私達だからこそ、世間一般の青春よりも、濃い青春を送れていると私は思う。私達の青春は、灰色なんかではない。多くのことを感じ、考え成長することが出来る時間。まぎれもなく虹色に輝いている。だから、大人の方々は私達を「かわいそう」と思う必要など全くない。私達を見て、この社会状況の中でも全力で物事に挑む力があって「さすが」と思っしてほしい。

この先の社会がどうなるのかなど私には、到底わからない。あと数ヶ月で中学校を卒業する。その先の高校生活もマスクと共に過ごすのかもしれない。しかし、私は高校生活を今と同じように、いや今以上に楽しみ、充実した毎日にする事ができると自信を持って言える。どんな状況でも全力で駆け抜ければ必ず自分自身が満足する結果になると私は学び、知っている。何度も何度も怒りと涙を堪えながらこの時代を生き、この時代を糧とした私達若者が創りあげる日本の未来はきっと明るい。だからこそ私は、その未来に向い、あたり前と感ぜられる日々の幸せや、どんな時でも支えてくれる最高の仲間感謝しながら全力で私の道を歩んでいきたいと思う。そしてかつての日常が再びあたり前となると信じている。

この時代を生きていることは私の誇りだ。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## 不登校だった私

横浜市立南戸塚中学校 3年 <sup>おおた</sup>太田 <sup>けんしん</sup>謙進

私は小学6年生から不登校になった。友達関係のやり取りが色々重なって、心の負担が増えてきたからだ。学校に対しての焦りや不安、罪悪感に押しつぶされそうになり、学校を休んでいても気持ちは全く休まらなかった。次の日も次の日も学校に行けない日が続く中で、もう誰とも会いたくなくなってしまい、外に出ることさえも難しくなってきた。

そんな時、母は私が苦しんでいることを知り、色々な場所に相談しに行った。あまり外に出る気持ちではなかったけれど、母が見つめてくれたハートフルスペースという場所に行ってみた。最初は不安しかなかったけれど何回も通っているうちに、だんだん心が開いてきた。そこでたくさんの先生に出会って、あなたはあなたのままでいいと受けとめてもらえた。

学校では、友達と同じでいなければならない、と弱みを見せないように頑張っていたけれど、私はすごく疲れていたのも、ハートフルの先生方に丸ごと受け止めてもらえたことで少し安心したのを覚えている。

ハートフルには通っていたけれど、中学校にはなかなか行けない日が続いた。しかし中学校でもたくさんの先生に出会った。

中2の夏、時々勉強を教えてもらっていた祖母から「あなたがやる気になれば、いつでも勉強は取り返せる。」と言われた。その頃には、無理して学校に行く必要はないと言われていたけれど、私の中で心が動き始めた。

中2の秋、当時の担任に相談して僕は学校に行くことを決めた。行く理由やきっかけは私自身にもよく分からないけれど、疲れていた心のエネルギーが、しっかりと充電されているのは感じていた。

登校初日、やはり緊張していたけれど、思っていたよりも周りは普通に接してくれた。

そっとしておいてほしい私にとって、特別扱いをせずに、普通であることが一番嬉しかった。

時々怖くなったり、行きたくないと思ったり、みんなにどんな風に見られているんだろう、不登校だったって知られたくない、そんな色々な気持ちに押しつぶされそうになった。でも、毎日学校に通っているうちに気の合う友達もでき、学校生活が楽しくなってきた。

今の自分はどうしたいのか、どこに向かっていきたい

のか、じっくりと話を聞いてくれた先生方。学校に行かない間もずっと気にかけてくれた友達、毎日一緒に登校してくれる友達。私が苦しんでいる時に一緒に悩んでくれたり、色々な場所に相談に行ってくれた家族。

丸2年間不登校だったけれど、当たり前前のことが当たり前でないことに、私は気付くことが出来た。

不登校になって良かったとは思わないけれど、色々なことに気付くことが出来たことは自分自身にとって良かったと思う。

これから高校受験を控えているので、それに向けての勉強も大事だけれど、中学校生活に悔いが残らないように、今自分の周りにいる先生方や友達との日々を大切に、大切に過ごしていきたい。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## 社会を作った大人たちへ

横浜共立学園中学校 3年 <sup>さいお</sup>齋尾 <sup>とわの</sup>都和乃

「思ったことを素直に書きましょう。」大人は、このような問いかけに子供が本当に本音を書くと思っているのだろうか。素直に書く人は、日本の中学生の中ではほとんどいないのではないかと思う。

「子供の書く『正直な思い』を受け入れる」と言っている自分に大人たちは酔っているだけのように感じる。大人に責任を追及する主張ではなく、環境や政治など大人もどこか他人事として捉えられて、「清く正しい」主張が書かれた「大人が望む内容」の作文が「中学生らしい素直な作文」として暗に選ばれている気がしてならない。だから、本音を書かなくなっていくのだと思う。

確かに、深く踏み込まないのが日本の美德という側面もある。でも相手を傷つけないから、周りから浮きたくないから、と回りくどい言い回しを使ったり、考えを隠したりすることがある。実際、私も友達との関係を壊したくないがために、本音を隠したことは数え切れないほどある。人と話す場に行くと自然に意見を押し殺して空気を読むスイッチが入って自分の意見を主張せずに相手に合わせるのが普通になった。でも空気を読むことに疲れて自分の本音がわからなくなる時がある。

そんなときテレビで、異国の大学生どうしの英語での討論会を見た。イエスなのかノーなのか、賛成なのか反対なのか、はっきりと自分の意見を述べていて、日本語と違って分かりやすかった。お互いの意見をしっかり聞いて、反対意見の中にも一定の評価や同意できる点を見出だして素直に伝えたと、周りに同調しない意見が言えて、前向きな話し合いが出来るのだと分かり、本音を言うことが怖い私は驚いたが羨ましくも感じた。現状として、私の目にする大人の社会は、各々の主張を繰り返すばかりでお互いの意見を取り入れようと言う意識が少ないように見える。だから私は、彼らのように周りに上手に本音を伝えたい、言ってもらえるようになりたいと思った。

確かに、私も本当を言って良い結果になったこともあるが後悔したこともある。でも、言わなくて助かったと思ったことや、反対に苦しくなったこともある。小学生の時、多数決で多数派と少数派の人数に大差がつくと、よくクラス全体を巻き込んだ少数派に対する「説得の時間」が設けられた。話し合いを止めてまで少数派が多数

派の意見になるまで諭され、次第に意見を変えないといけなような雰囲気になり、結局「満場一致」の形にしてから話し合いが再開される。そのような話し合いに慣れてくると、気まずい雰囲気になるのを防ぐために多数派とは異なる意見が出るとすぐに先生を含めクラス全体から集中砲火が浴びせられるようになり、段々スローガンのような意見しか出てこなくなった。

本音を伝え合えるようになるためには「伝え方を学ぶ」のではなく、「違いを受け入れ合う」ことが大事だと思う。意見を言えるようになることだけが大切ではない。まず話を聞いて、自分とは異なる意見を「反対意見」ではなく「他の視点から見た一つの意見」と捉えられるようになったら、受け入れられるようになると思う。

今の私たちは言ったところでどうせ意見を受け入れてもらえない、人と違うことはよくないことだと感じているから、本音を言えなくなっていると思う。誰もが一人一人の違いを当たり前だと思えるようになるべきだ。また、大人の自己満足ではなく子供が納得するまで話を聞いてくれる、思いを汲み取って寄り添ってくれる大人が自分の周りにいれば本音を話せるようになる気がする。私も、違いを受け入れられる人間となれるよう成長していきたい。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## ひと手間の大切さ

神奈川県立相模原中等教育学校 1年 酒匂 日和

私と母のメッセージアプリでの会話。

「ただいま。」と私。

「おかえり。」と母。

続けて「雨が降りそうだから、洗濯物先にしまっ  
と母。

季節は梅雨。制服から着替え、ジメジメから早く解放  
されたかった私は、

「何着よ」と悩んでいるマークの絵文字を添えて送っ  
た。

すると母。

「みんなの洗濯物だもん。仕方ないよ。」

スマートフォンを通して伝わってくる意味不明な母  
の怒り。

「え。」私。

「え。」母。

なぜ母は怒っているのだろうか、私には怒らせた自覚  
はない。会話を読み返しながらしばらく考えた。

そして答えが出た。私は「何を着ようかな」と母に相  
談したかっただけなのに、洗濯物をしまっしてほしいと  
お願いした母は「なんちゃくよ」と私が洗濯物の多さに文  
句を言っていると勘違いしたようだった。それなら母が  
怒るのももっともだ。

あとから母に聞いた話だと、私が添えた「悩んでいる  
マーク」は、母にとっては「モヤモヤ怒りマーク」だっ  
たらしい。

同じように、メッセージアプリでのやり取りで、誤解  
をしてしまったり、反対に誤解を与えてしまったりした  
経験はないだろうか。

幸いにも私の場合、身内とのやり取りだったのですぐ  
に誤解は解けたが、これが先輩や友だちとのやり取りの  
中で発生したことだとしたら。想像するだけで、顔が石  
像化したうさぎの絵文字を連打したくなるほど怖い。

これが現実になってしまわないように、先ほどの母と  
のメッセージアプリすれ違いハプニングの原因を私なり  
に考察してみる。

まず、私の文には「を」が抜けていた。また「着よう」  
ではなく「着よ」と母が目の前にいるかのような語調で  
打ってしまっていた。面と向かっての会話や、声を聞く  
ことのできる電話などだったら「を」がなかったり話し

言葉であったりしても、表情やイントネーションで相手  
の言おうとしていることを読み取ることができる。

次に、洗濯物をしまうことへの返事をすぐにしなかつ  
た。自分の言いたいことを伝える前に、返事をしておけ  
ば母の洗濯物への心配も軽くなっただろう。

そして、急に何を着たらいいかという違う話題にして  
しまった。例えば「ところで、暑いから何を着よう」と  
いうように前触れがあったらよかったのかもしれない。

また、母も気をつけるべき点があった、と言う。「なん  
ちゃくよ」と、予期していなかった返答があったときこ  
そ、お互いのやり取りを読み返すべきだった、と。それ  
は私にも言えることだったと思う。

すれ違いは、漫才やコントなら笑えるが、リアルに自  
分の身に起こると、相手との間に溝を作りかねない。

これらのすれ違いハプニングの考察をふまえ、私がた  
どり着いた策は「ひと手間を加える」ということ。「を」  
を入れるひと手間。話題を変える前に返事をするひと手  
間。「ところで」のような接続語を入れるひと手間。お互  
いの表情が見えない会話であるということ意識し、一  
呼吸おくひと手間。

これらのことを私は面倒くさながら大切にしたい。ま  
た私だけでなくSNSを使う全ての人にもこの4点が浸  
透することを願う。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## より良い活動に向けて

伊勢原市立中沢中学校 2年 <sup>すずき</sup>鈴木 <sup>しほ</sup>詩歩

私は学校生活の中でリーダーと呼ばれる立場に立つことが多いと思います。小学生の頃は面白そうだなと思ってやっていたのですが、中学校では、面白そうが一割、自分がやった方が上手くいくかなと思うことが七割、求められてなることが二割となっています。さすがに、面白そうの一割がなくなってしまうとモチベーションが持てず何もできなくなってしまいます。この状態でリーダーになってさまざまなことを考えるようになりました。

学年委員の活動で、学年目標を模造紙に書いて掲示することが決まりました。一学期に決まったにもかかわらず、二学期になっても出来上がらず、先生から「そろそろ仕上げようか。」と声がかかりましたが、なかなか委員が集まらず、最後の方は一人で進めたこともありました。ようやく作業が終わり、残りは掲示となったところで、他の委員が「飾りを付けよう。」と言い出し、他の子たちもそれに賛同しました。結局、予定よりとても遅れて掲示されました。

私は、一年間の目標なので一学期のうちに終わらせる活動だと思っていました。そのためにはやりたいことをやるだけではダメなんだと思います。理想や主張があるだけでは務まらないです。委員全員が集まれる時間と、その中でできることを見極めることが必要なんだと感じました。

鎌倉遠足では、また別のことに気付きました。後日、新聞を書くことになっていたため、それぞれに行きたいところ、書きたいところを聞きました。しかし、当日、道に迷ってしまい、行けなかった場所がありました。予定通り行かなかったにもかかわらず、大仏の前の大きなスイカにみんなで笑い、「あれは本物か。」「雨が降ってきた。雷も鳴ってるぞ。」「大仏がスイカを食べて腹を下したのか。」と楽しく過ごしました。その後の新聞作りも、みんなで書きやすいところを交換し合って作ることができました。楽しく過ごせたことで活動が上手くいったのだと思います。

私は、できるだけ自分で決められるようにしてあげたいと思いました。その方がみんなが楽しめるからです。なので、いつもみんながきちんと自分の意見が言えているか気にかけていました。

部活動でも、部長という立場になりました。自分に対しては少し厳しくなったかもしれませんが、できているか

どうかはわかりませんが、言っていることとやっていることが違うのは良くないと考えながら行動しています。特に、後輩に言ったことは必ず自分は行動しようと努力しています。後輩に対しては、ただただ可愛くてたまらないと思っています。後輩たちが自分たちの意見を言いやすいように人間関係を築きたいです。もちろん言わなきゃいけないことは言いますが、それ以外は、高い位置からものを言わないようにし、聞き上手になりたいと思っています。一人ひとりとの関係が結果的に良いチームを作っていくので大事にしていきたいです。

この夏休み、私は、学校も学年もばらばらの中高生チームで水中ロボット製作を行いました。ここでは、リーダーはいません。リーダーができるような人がいなかったからです。ですが、活動はまとまっていた。各々が専門分野(得意分野)を持っており、それにより化学反応が起きていたと思っています。みんな無意識にそこに信頼がありました。

そこでは学校のような決まりがありません。自分たちでルールを作っていきます。リーダーがいなくても活動は上手くいくのだと感じました。

「あなたの知らないあなたの強み」(著者古野俊幸)という著書の中で、リーダーには、引張型と協調型があると書かれてありました。それぞれのデメリットとして、引張型はワンマンになりやすく、周囲の不満が起きます。協調型はみんなの意見を聞けばかりでまとまりにくくなります。引張型と協調型の両方が必要だと考えますが、この両方を成立させるのは難しいと私は思います。

では、自分はどんなタイプのリーダーなのかと考えたときに、答えがありませんでした。私にとっては、どんなリーダーであるかが大事ではなかったからです。私にとって重要と考えることは、チームや活動が楽しんでできている状態です。目標達成に進んでいること、それを生き生きと行えていることが大事であり、リーダーは足りない点を補ってあげれば良いと思います。

そして、リーダーのコツとして、「どんな状況においても楽しんでできる人ほど、上手くいくのかもしれない。」というのが今現在の私の答えなのだと思います。今後も自分を過大評価せずに、みんなと自分が楽しめるよう行動していきたいです。

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

## 生きること

洗足学園中学校 2年 <sup>のもと</sup>野元 <sup>しい</sup>志唯

「生きることが必ずしも正しいこと」人々は当たり前の様にそう言う。異なる考えの人がいたら、非人道的だとそれを非難する。しかし、本当にそうなのだろうか。

私にはもうすぐ百歳になるひいおばあちゃんがいる。今は老人ホームに住んでおり、認知症ステージ7だ。お世辞にも元気だとは言えない。今では、毎日その老人ホームに通っている私のおばあちゃんの名前すら言えない状況だ。一日のほとんどは寝て過ごし、一人では動くことができない。私はそんなひいおばあちゃんの話をおばあちゃんから聞いて、ときどき思う。ひいおばあちゃんは、何のために生きているのだろうか。

もし、私が同じ状況だったら「殺してほしい」と思うだろう。認知症が治ることも望めず、自分一人では何もできなくて、多くの人に助けられながら人生の最期を待つ。そんなだったら、いっそのこと、楽に殺してほしい。いわゆる「安楽死」だ。

しかし、今の日本の法律ではいかなる場合でも、それは認められていない。確かに、安楽死を完全に認めてしまったら、未来のある若者が死んでしまったり、安楽死と見せかけた殺人事件が起こったりしてしまうかもしれない。ただ、場合によっては、安楽死を認めてもよいのではないだろうか。実際に、スイスでは「自殺ほう助」を認める法律がある。「自殺ほう助」とは、医師から処方された致死薬を患者本人が体内に取り込み死亡することだ。これにより、がんやパーキンソン病などによって明るい未来が見えない状態で辛い思いをしている人たちが、家などの大切な場所で安らかに死を迎えることができる。私は日本にも同じ制度を取り入れるべきだと思った。しかし、現状日本には取り入れられていない。それは、日本の特色に、同調圧力が強いということがあると思う。これを認めている多くの外国では、個人個人が考えを持っており、その考えを尊重する。しかし、日本人は優柔不断な人が多く、周りの人の意見などに流されやすい傾向がある。なので、たとえ死にたくない人でも、周りの意見などによって死を決断しなければいけない人も出てきてしまう可能性がある。

私はこれらのことを調べて、一概に安楽死を認めるべきだとは言えないと思った。しかし、だからといって一律に「自殺ほう助」を禁止する必要はないのではないだ

ろうか。それを受けるための条件をもっと複雑にして、その厳正な審査を通った人のみを受けられる仕組みにしたら良いのでないか。それでも日本ではそれは行われえない。それはやはり、「生きることが必ずしも正しいこと」という固定観念が存在するからだと思う。

日本は平均寿命が世界一長い国と言われている。それはなぜだろう。様々な理由があると思うが、その一つに、日本人が「長く生きること」をととても重視するということがあると思う。しかし、本当にそれが一番大事なことののだろうか。それは「どう生きるか」よりも大事なことののだろうか。私は違うと思う。人間は必ず終わりを迎える。だから、その限られた時間の中でどのように生きるのか、どのような終わりを迎えるのか、私はそこを重視したい。

「生きること」それは当然大切なことだけど、それだけにこだわっているのはいけないと思う。安楽死の問題はとても複雑で、色々な意見があり、それは永遠に答えの出ない問題であると思うが、一概に「生きることが必ずしも正しいこと」と言うのは間違っていると思う。死ぬことよりも苦しい思いをしている人、このまま生きていても一生自分一人で動くことができない人、色々な場合を様々な観点から考えて、これからも議論を続けるべきである。

## あなたの声、心に届け

山梨県 北杜市立甲陵中学校 3年 前橋 真子

「真子ちゃん、きょうだいいるの?」「妹と弟がいるよ。」  
「妹かぁ。羨ましい。」羨ましいなんて……。私は妹の存在を口に出すのをためらうことがあった。

私の妹は生まれつき音が聞こえない重度難聴だ。左耳に音を増幅させる補聴器、右耳に脳に音の信号を送る人工内耳を付けている。発音も上手ではない。私が小学生のとき「妹、障がい者なのに元気だね。」と友達に言われた。なんとも言い表せないモヤモヤが私の心に渦巻いた。障がいのある妹が明るく元気なのは普通のことではないと思い、恥ずかしさを覚えた。そしていつの間にか妹のことを口にするのも、一緒に出掛けるのも辛くなった。

この春中学校入学を控えた妹は、補聴器を新調した。私も一緒に店に行った。そこには色とりどりの補聴器が並んでいた。お店の方は、好きな色を選ぶよう言った。私は「真紀ちゃん、黒か茶色を選んだら?」と勧めた。強く勧めた。黒か茶色なら髪の毛と同調して、あまり目立たない。みんなと変わらない見た目で見られる。恥ずかしい思いをしなくてすむように、何度も言った。しかしそんな私を見て妹は言ったのだ。「誰になんと思われても、これは私の耳なの。私は黄色い補聴器の私を見てもらいたい。」妹に言われてハッとした。障がいにこだわっていたのは私自身だったのだ。

聴覚障がいのある妹が、明るく元気なのはおかしいのか。いや、妹は妹だ。妹が笑顔を絶やさないのは、今まで本当に沢山の努力をしてきたからだ。私と同じ小学校に行くために、人工内耳の手術を受け、手話が無くても友達と話せるように病院やろう学校に通って、発音練習を頑張っていた。誰にでも優しいのは、自分がされて嫌だったことや辛かったことを痛いほどに知っているからだ。私は、今まで辛くて、悔しくて泣く妹を何度も見た。でもその度に努力してハンディキャップを乗り越えていた。そんな妹の努力を一番近くで見ているのは私だ。障がい者というフィルタを通さず、ありのままの妹を見て欲しい。手話や口話、筆談、テレビの字幕も全部、社会と繋がるコミュニ

ケーションツールの一部だ。それが妹の全てではない。

聴覚障がい者は、一度見ただけでは耳が不自由かわからず、接し方に戸惑うことがある。でも耳の不自由な人がみんな、相手に手話を望んでいるわけではない。聴覚障がい者が困っているときは、その人の正面から「何か手伝えることはありますか。」と口を大きく開け、ゆっくり話しかけてほしい。

「思いやりのある言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっとこだまする。」これは貧困や病に苦しむ人の救済に生涯を捧げた、マザーテレサの言葉だ。心のバリアフリーの精神を表している。まずは聞こえないことについて知ろうとしてほしい。その思いやりでどれだけ救われる人がいることだろう。

妹は毎日黄色い補聴器をつけ、お気に入りのテニスラケットを持ち元気に登校している。先日友達に「妹さん明るくて、部活のムードメーカーで、頑張っているよ。」と言われた。ありのままの妹を見てくれていると分かり心が温かくなった。そんな妹は私の誇りだ。

私たちにできることには限りがあるかもしれない。それでもあなたの身近にハンディキャップを持つ人がいたなら、そのハンディというフィルタ越してではなく、その人自身や心に寄り添ってほしい。障がいのある人への理解が進むことで、一人またひとりと笑顔が増えていくと確信している。

妹の耳に、あなたの声は聞こえないかもしれない。でも、あなたの気持ちは妹の心に確実に、届いている。

## 実施概要

### 1 目的

中学生が、日常生活の中で考えていることを作文にして発表することを通して、広い視野と柔軟な発想や創造性ととも、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらう力を身につけることを目的とする。

### 2 主催

神奈川県

### 3 後援

神奈川県教育委員会 神奈川新聞社 **NHK** 横浜放送局 **tvk**  
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会

### 4 対象

神奈川県内在住・在学の中学生（国籍は問わないが、日本語で発表できること）

### 5 応募期間

令和4年6月1日（水）～9月5日（月）

### 6 発表大会

- (1) 期日 令和4年9月25日（日）14:00～16:15
- (2) 会場 県立青少年センター スタジオ HIKARI
- (3) 内容 作文発表（優秀賞以上の6人） アトラクション 表彰

### 7 選考

- (1) 作文審査（事前審査）  
審査会において作文発表大会出場者と奨励賞受賞作文を決定
- (2) 発表審査  
作文発表大会において、最優秀賞と各優秀賞を決定

（審査員）

神奈川新聞社報道部記者兼論説委員	成田 洋樹
神奈川県公立中学校長会（横浜市立日吉台西中学校校長）	松田 哲治
神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長	佐藤 節子
教育局支援部子ども教育支援課長	下反 達二
神奈川県立青少年センター副館長	立石 えり子

### 8 表彰

- |                               |     |
|-------------------------------|-----|
| ・最優秀賞（神奈川県知事賞）                | 1名  |
| ・優秀賞（神奈川県教育長賞）                | 1名  |
| ・優秀賞（神奈川県福祉子どもみらい局長賞）         | 1名  |
| ・優秀賞（神奈川新聞社賞）                 | 1名  |
| ・優秀賞（NHK横浜放送局長賞）              | 1名  |
| ・優秀賞（tvk賞）                    | 1名  |
| ・優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞） | 1名  |
| ・奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）         | 10名 |

### 9 応募状況

- ・応募者総数 685名
- ・参加学校数 43校

令和4年度「中学生の主張 in かながわ」記録集

編集・発行

神奈川県立青少年センター

〒220-0044

横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

電話 045-263-4466

ファクシミリ 045-242-8190

本記録集の無断複製、転載等は禁止いたします。



私に残りの時間を大切にしたい